

# 短歌

## 奨励賞

### 日々に

蓮代寺町 山本 美保子

木洩れ日の風に若葉の揺るる影じやれあふ子等の背せうらに流る

冬晴れの道路を渡り電柱の伸びたる影がわが窓に来る

パトカーに付き添はれ行く登校の子らランドセルの鈴を振りつつ

場内に響く太鼓に涌く拍手笑む子の顔に汗のかがやく

連れ立ちて自転車を漕ぐ子らの背の白きゼッケンゆるる陽炎

## 選評

永井正子

今年の応募は十六篇である。関東在住の二人の作品もある。過去の「小松文芸賞」の受賞者の投稿も有難い。短歌欄のレベルを保ち、小松の短歌発展に力を添えていることの自覚に他ならないと思う。今回は力量に差が無い割に、抜き出た作品が無く、小松文芸賞を見送り、奨励賞三篇を推薦したい。この三篇以外は、秀作順に記載してある。

奨励賞の一篇目を山本美保子作品「日々に」とする。一首目、「木洩れ日」と「若葉の揺るる影」にやや重複感があるが、影が子等の背せうらに流れていると把握、動きのある爽やかな作品となった。三首目のパトカー出動の物々しさすら楽しげな、登校の光景が眼に見えるようだ。ランドセルの鈴の音もあどけなさや平和を象徴。一連、地域ぐるみで周囲の子どもたちを見守る豊かさ溢れる歌である。

季節の彩り

長田町 中田 貴美恵

花満つる垂れ桜の細き枝風吹くままの自在が羨し<sup>とも</sup>

青空に弧を描き<sup>か</sup>伸ぶる雲の先小さき機影の日に入りゆけり

鉢植糸の繁る葉陰に雨蛙弱きが凌ぐ真夏の炎天

南天の白く小さき花の辺に羽音ひびかせ小虫の寄り来

満天星<sup>どうだん</sup>の葉の軽やかに飛びてゆくわれの小さき憂ひも共に

奨励賞の二篇目、中田貴美恵「季節の彩り」は、底流する優しい観照の眼が好ましい。風のままに吹かれる枝の自在さに心を寄せ、鉢の葉陰に炎暑を凌ぐ雨蛙に共感するナイーブな感性。二首目の、飛行機雲の先端の機影が「日に入りゆけり」との大胆な把握も気負ったところがない。初心の作者の素直な言葉遣いに、読者も教えられるところが大きいと思う。短歌は、むやみに難解な言葉を使い、背伸びするものではなく、自分の持っている言葉を駆使するだけで、十分良い歌が詠めるのである。

心の空白

白山市 酒井 千代栄

絶句して答へ探すも言葉出ず思ひもよらぬ長き空白

病院の食堂に見ゆる様々な覚悟を持ちし人の沈黙

ケイタイで桜の開花を母に見す孫の仕草の何と優しく

看護師のきびきびとせし動作見て羨えし心に吾の鞭打つ

誰が置きし折り鶴ならむ癌病棟の窓辺にぼつんと一羽のとまる

更に奨励賞の三篇目として酒井千代栄  
作品「心の空白」を推す。

寄せられた十首の中に「癌病む娘」の語があり、介護の日々の歌と気付く。生涯においての癌の罹患率は二人に一人の割合と言われる昨今だが、子に病まれるのはやはり堪えがたい。

一首目、自身の動顛のさまをよく捉えている。小題となった「空白」もここからであろう。院内に出会う病者の沈黙の姿、看護師の立ち働くさま、癌病棟の窓辺に置かれた折り鶴などから示唆を与えられ、立ち直っていく母の姿がある。ほか「何十回山側環状線を通ひしか治癒と聞く今日初蟬の声」があつたことも書き足しておきたい。